

尾州産の赤穂義士

場所

鶴舞中央図書館 2 階

期間

2009 年 10 月 17 日（土）
～2010 年 1 月 14 日（木）

年末のテレビ時代劇の定番といえば、「忠臣蔵」を挙げる方が多いのではないのでしょうか。この「忠臣蔵」の元となったのが元禄赤穂事件です。この事件は、元禄 14 年（1701）3 月 14 日に江戸城松の廊下で勅使馳走役の赤穂藩主浅野内匠頭長矩が指南役の吉良上野介義央に斬りつけたために切腹・改易となり、その翌年に大石内蔵助ら赤穂義士 47 人が吉良邸に討入り、吉良上野介の首級をあげて仇討ち果たしたというもので、元禄の世を多いに騒がせました。とりわけ、元禄 15 年（1702）12 月 15 日の赤穂義士 47 人の討入がこの事件の山場であることから、「忠臣蔵＝12 月」のイメージがあるのかもしれません。

さて、とても有名な赤穂事件ですが、この赤穂義士 47 人の中に尾張出身の人物がいたことをご存知でしょうか。「片岡が片手にたらぬ吉良料理 源五は多いのたち売をせよ」という江戸時代の落首があります。この中の「吉良」というのはもちろん「吉良上野介」のことです。そして、この落首の「片岡」「源五」という人物こそ、尾張出身の赤穂義士「片岡源五右衛門」なのです。

片岡源五右衛門は、寛文 7 年（1667）に尾張藩士の熊井重次郎（十次郎とも）の子として、名古屋に生まれました。祖父の熊井藤兵衛はもともと浅野幸長の家臣でしたが、浅野幸長の女春姫が尾張藩祖徳川義直に輿入する際に、これ従って尾張藩に仕えることとなりました。片岡源五右衛門は 8 歳のときに、浅野家分家の赤穂藩主浅野氏の家臣で叔父にあたる片岡六右衛門の養子となりました。家督を継いで浅野内匠頭に仕えたと、片岡源五右衛門は主君の寵愛を受け、100 石だった禄は三度も加増されて、ついには 350 石になっています。これは、赤穂義士 47 人の中では大石内蔵助に次いで 2 番目に多い知行です。

元禄 14 年 3 月 14 日、片岡源五右衛門が江戸城大手馬先で供待ちをしている最中に、江戸城松の廊下の刃傷事件が起こります。捕らえられた浅野内匠頭は田村右京大夫邸お預かりとなり、即日切腹が命じ

片岡源五右衛門の謎の名前

片岡源五右衛門の幼名は「小六」、諱名は「高房」です。また、討入前には「尾州浪人吉岡勝兵衛」という変名を使っていました。片岡源五右衛門の墓はいくつかありますが、名古屋の乾徳寺の墓には「直勝」と刻されていると紹介する資料がありました。大正時代に発行された箕形鉄太郎著の『片岡源五右衛門と名古屋』には「高房の文字、磨滅甚しく、読み難ければ、直勝と読みしものもありき。今之を撮写するに、高房なること疑を容れず」と書かれています。「高房」と「直勝」では随分異なる気がしますが、どこでどう間違えたのでしょうか。

られました。このとき、田村邸に駆けつけ片岡源五右衛門が、最後に今生の暇乞のために拝顔を許されたいと願い出たため、拝顔できるようにとりはからったと浅野内匠頭の切腹に立ち会った副検使多門伝八郎が記しています。また、片岡源五右衛門と磯貝十郎左衛門にあてた浅野内匠頭の遺言口上書があったと田村邸の記録にあります。

その後、浅野内匠頭の遺骸を泉岳寺に葬ると、片岡源五右衛門は、磯貝十郎左衛門、田中貞四郎、中村清右衛門とともに髪を切って主君の墓前に供えて仇討ちを固く誓い合います。こうして、元禄赤穂事件の第二幕が始まります。

展示資料

1	『赤穂義人録』（「赤穂義人録」と「赤穂義人録後語」の合冊）写本 3冊 河ア 5
	当館の特別集書コレクションの一つである河村文庫に、赤穂事件関係の資料もありました。赤穂の遺臣を「義人」と名づけた室鳩巢による『赤穂義人録』は、その後の赤穂義士の評価を決定づけたと考えられています。
2	『赤城盟伝』 写本 1冊 河セ 50
3	『介石記』 写本 2冊 河カ 13
4	『義士清談』 写本 1冊 河キ 14
5	『赤穂義人録補正』 明治5年刊 2冊 市 8-121
	名古屋で蠟燭商を営んでいた国枝松宇は、数十年をかけて赤穂義士の遺聞を収集し、明治5年に『赤穂義人録補正』を著しました。
6	『赤城義臣伝』 享保4年刊 15冊 旧わ 426/142
	片島武矩が編纂した『赤城義臣伝（太平義臣伝）』は赤穂義士の17回忌にあたる享保4年（1719）に刊行されました。首巻に義士銘々の図像がありますが、そのうちの近松勘六の図像の賛は尾張藩士近松茂矩が書いています。近松茂矩は赤穂義士の近松勘六・奥田定右衛門兄弟と同族であったことや、片岡源五右衛門が「夜討の一両日前に、中根次郎左衛門が方へ、他国へ趣く故、暇乞のためと称して」訪れていたことを『昔咄』（『名古屋叢書 第24巻』所収）に記しています。
7	「片岡源五右衛門高房」 『秘蔵版忠臣蔵』 名古屋タイムズ社 1977年 p82-83
8	「片岡源五右衛門高房」 『誠忠義士伝』 風俗絵巻国書刊行会錦絵部 1917年
	風俗絵巻国書刊行会が江戸時代末期の人気絵師・歌川国芳の武者絵（義士画）に略伝を付したもの。国芳が最も得意としたのが武者絵で、「豊国にかほ 国芳むしや 広重めいしよ」（『江戸寿那古細撰記』）と言われました。『誠忠義士伝』も国芳による武者絵の一つで、嘉永元年（1848）の泉岳寺開帳の前年弘化4年（1847）7月に売出されましたが、これが大評判となり、各図8000枚ずつ売り上げた『藤岡屋日記』に記されています。
9	「笠岡傳五右エ門高房」 『国芳の絵本1』 岩崎美術社 1989年 p137
	歌川国芳の『忠臣銘々画伝』（嘉永元年（1848）、国芳52歳の作品）より。「片岡源五右衛門高房」の名前は「笠岡傳五右エ門高房」と表示されています。
10	『高木繁浮世絵コレクション』 名古屋市博物館 2001年 p16-17
	忠臣蔵などの敵討ちは、江戸っ子の最も好む話の一つでした。「武者絵の国芳」は忠臣蔵を題材とした錦絵を多数描いています。

11	「赤穂分限帳（かわら版）」 『太陽コレクションかわら版新聞 1』 平凡社 1978 年 p16-17
	赤穂義士の討入の翌日には、早くも事件の様子を伝えるかわら版が売り歩かれたそうです。そのあと赤穂事件を題材としたかわら版が多数版行されており、「赤穂分限帳」もその一つです。「赤穂分限帳」には、赤穂城明渡し当時の藩士の身分禄高などを記し、討入に参加したものをのぞき、切腹したもの、変心者、赤穂退散者などにはそれぞれ印がつけてあります。最上段に、「側用人三百石 片岡源五右衛門」の名前があります。

12	「片岡源五右衛門高房墓」 『尾張名所図会前編 2』 わ 0A2/277/2
	「片岡源五右衛門高房墓」の項目に「東田町乾徳寺にあり。法名刃勘要剣信士。武家熊井氏、今井氏より立つ赤穂の義臣四十七士の内の一人なり。実は当府武家の子にして、赤穂の片岡氏の養子となる。主家廃滅の後、徒党何れも身をやつしけるが、高房も熊胆丸をうりて当府に來り、実父母にまみえけるに、その父仇を復する所存なきかと疑ひ憤り、ののしるに腰ぬけをもって論ずれども、高房本心を明かざす、黙して去りぬ。日ならずして復讐事終り、その次第を一紙にすりて読み売りするもの門外を通りしかば、実父走り出で、その人数のうちに我が子はなきかといひざま、その紙を引きとりよみとるとひとしく、地にまろび声をあげて喜びけるとぞ。」と書かれています。片岡源五右衛門高房の墓は移設されて現在は平和公園にあります。

13	「泉岳寺開帳」 『特別展大にぎわい城下町名古屋』 名古屋市博物館 2007 年 p104-105
	赤穂事件から約 100 年後の文化 5 年（1808）に京・大阪方面で泉岳寺の出開帳が行われ、その帰途、名古屋でも開帳が行われました。このときの様子は尾張藩士高力種信（猿猴庵）が記録絵本（大惣本）として書き残しており、「寺宝を運ぶ行列が名古屋に到着する場面から展示会場の様子まで、詳しく描かれているばかりでなく、会場での解説（絵解き）のせりふまで、びっしり余白に書き込まれている」そうです。

14	「金明録（猿猴庵日記）」 『名古屋叢書三編 第 14 巻』 名古屋市教育委員会 1986 年 p228-229
	尾張藩士高力種信の日記によると「9 月 20 日から 15 日間」の開帳を予告する札が立っていましたが、実際には 21 日に到着したため、「9 月 25 日から 10 月 10 日」まで開帳する旨の掛札がでました。盛況だったためか、さらに 14 日まで日延べして、最終日には義士追善供養が行われました。また、泉岳寺開帳に便乗して清寿院で「おどけ開帳」の見世物が行われています。「おどけ開帳」とは、「勝手道具や小間物を尊い宝物に見たててこっけいなことばで説明したり、おもしろい法談をしたりする興行」（『日本国語大辞典』）で、赤穂義士 47 人の道具に見立てたものを並べて、「シワノセンダクジ」（芝泉岳寺をもじったもの？）という立札が立てられました。

元禄御豊奉行の日記と赤穂事件

尾張藩士朝日重章^{しげあき}は、元禄 4 年から享保 2 年に至る 27 年間の日記『鸚鵡籠中記』を書き残しており、この日記には同時代の出来事として赤穂事件についても記録しています。また、重章は父の重村とともに尾張藩関係その他の古書や珍書を筆写・抜粋した『塵点録』を著しており、赤穂事件に関するものも含まれているようです。当館では名古屋市史編纂室が明治 45 年に筆写したものを所蔵していますが、主に尾張関係のものが抜粋されているため、残念ながら赤穂事件に関する部分はないようです。

武者絵の国芳と尾張の幼君

弘化4年(1847)7月に売出された歌川国芳画の『誠忠義士伝』が大当たりしたのに少し遅れて、嘉永2年(1849)5月に尾張藩の第13代藩主徳川慶臧は14歳で夭折し、尾張徳川家の菩提所である名古屋の建中寺に埋葬されました。

そして、約100年後の昭和27年(1952)に建中寺の墓所が移転されることになり、慶臧の墓も発掘調査が行われました。すると、副葬品として幕末期の人気浮世絵師の錦絵などが多数発掘され、とりわけ、国芳による和漢の武者絵が圧倒的に多く見つかりました。尾張の幼君は大の国芳ファンだったと考えられますが、『誠忠義士伝』などの赤穂事件に関係するものはないようです(『浮世絵再発見』 内藤正人著 小学館 2005年)。幕府の処分に対して公然と異議申し立てを行った赤穂義士の錦絵は、尾張徳川家の藩主にはふさわしくなかったのかもしれませんが。

の書があることから、『増補赤穂義士事典』には「父に復讐の計画を話したところ、父からそんなことをしても、とうてい成功すまいと、切に止められた」とあります。

いよいよ吉良邸討入の時節が到来し、一兩日前に江戸詰めだった中根次郎左衛門(養父片岡六右衛門の娘の子)のところに「他国へ趣く故、暇乞のためと称して」訪れた片岡源五右衛門も、手筈どおり集合場所に向います。最後の集合場所である堀部安兵衛宅に全員が集まったのは子の刻(今の夜の零時)でした。吉良邸への討入は元禄15年12月15日の寅の刻・七ツ頃(今の午前4時)に始まり、表門組に属した片岡源五右衛門は、富森助右衛門、武林唯七と組んで屋内に斬り込み、赤柄の十文字槍をふるって奮戦しました。

討入の翌日には、早くも事件の様子を伝えるかわら版が売り歩かれており、それは片岡源五右衛門の故郷である尾張にも届いたことでしょう。『尾張名所図会』には「復讐事終り、その次第を一紙にすりて読み売りするもの門外を通りしかば、実父走り出で、その人数のうちに我が子はなきかといひざま、その紙を引きとりよみとるとひとしく、地にまろび声をあげて喜びけるとぞ」とあります。赤穂義士の行動を英雄視した一般民衆は義士をほめたたえましたが、学者の意見は分かれ激しい論戦が展開されました。幕府においてもどのような処分を下すかその裁決に苦しみましたが、將軍綱吉はついに切腹を申し渡すことを決定します。片岡源五右衛門は翌年2月4日に切腹し、主君の眠る泉岳寺に葬られました。

片岡源五右衛門らが赤穂に帰ると、城では籠城か殉死かの議論の最中でした。主君の仇討ちを誓った片岡源五右衛門らは大石内蔵介らの連盟に加わることを断り、江戸に戻りますが、堀部安兵衛らの江戸急進派とも意見が合わず、次第に孤立していきます。片岡源五右衛門らが大石内蔵介らの連盟に加わったのは、元禄15年3月のことでした。

主君の切腹から吉良邸討入までの間、江戸と赤穂・上方を何度か往復した片岡源五右衛門は、その途中で尾張の実父と対面する機会もあったことでしょう。『尾張名所図会』には「(片岡源五右衛門)高房も熊胆丸をうりて当府に來り、実父母にまみえけるに、その父仇を復する所存なきかと疑ひ憤り、ののしるに腰ぬけをもって論ずれども、高房本心を明かざす、黙して去りぬ」とあります。しかし、これとは逆に閏8月に父や兄弟にあてた義絶

参考資料

『増補赤穂義士事典』 赤穂義士顕彰会編 新人物往来社 1983年

『江戸時代落書類聚 上巻』 矢野隆教編 東京堂出版 1984年

『原色浮世絵大百科事典 第9巻』 大修館書店 1981年

『仮名手本忠臣蔵を読む』 服部幸雄編 吉川弘文館 2008年

『日本名所風俗図会 6』 角川書店 1984年

名古屋市鶴舞中央図書館

2009年10月発行